

関係把握力を鍛える国語の実践

—理解と表現の関連を通して—

船水 周*

Practice of The National Language to Train The Ability to Grasp Relationships
—Through the association of understanding and expression—

Hiroshi FUNAMIZU

Key words : 関係把握力 Ability to grasp relationships
理解 Understand
表現 Expression
関連 Related

1. 思考力の中核である関係把握力

言葉は人間がよりよく生きる上で必須のツールである。たとえば、自分と向き合い、思いを巡らす。物事や人と関わる。いつでも、どんなときでも、言葉は使われ続けている。

言葉の機能は多種多様である。様々な側面から取り上げられ、諸説入り乱れている。

岩淵悦太郎(1977)¹は、主な言葉の機能として、次の4つをあげる。

- ①認識 (言葉で捉える)
- ②思考 (言葉で考える)
- ③伝達 (言葉で伝える)
- ④創造 (言葉で作る)

岩淵の区分は簡明直截で分かりやすい。したがって、言葉の機能を意識的、持続的に学んでいく初学者にとって格好の指標になる。

平成 28 (2016) 年 12 月、中央教育審議会「答申」は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の

改訂方向を示し、「主体的・対話的で深い学び」を実現する教育課程の編成を求めた。

国語科では、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力の育成を目指すことになった。

これは前述した4つの「言葉の機能」を自覚させ、それらの能力を確実に育成することにつながる。言語活動(話す・聞く・読む・書く)を支える原動力として、主体的思考力の育成が一層求められ、自ら進んで言葉に関わり、言葉で物事や自他の思い、考えを関係付けて捉える力(以下、関係把握力と呼ぶ)が重視されるようになったといえる。

以上をもとに、本稿は、主体的思考力の中核とされる、言葉(国語)による関係把握力²に焦点をあて、理解と表現の関連を通して、関係把握力を鍛える国語の実践の有効性を確認し、その実践方法について具体的提案を行うことを目的とする。

* 東北女子大学

¹ 岩淵悦太郎『日本語を考える』(講談社 1977) p. 3

² 藤原宏『関係把握力による読み方指導』(明治図書 1984) pp.22-27

2. 教育で身に付ける資質・能力

平成 28 (2016) 年 12 月に示された中央教育審議会「答申」を受け、平成 29 (2017) 年 3 月に幼稚園及び小・中学校の新学習指導要領等が公示された。それに伴い、幼稚園は 2018 年度、小学校は 2020 年度、中学校は 2021 年度から新教育課程が全面実施になる。また、高等学校は 2022 年度から年次進んで新教育課程が実施される。

改訂学習指導要領等では、資質・能力の三つの柱が示された。たとえば、中学校・新学習指導要領解説総則編(平成 29 年 7 月)は、次のように示す。

「子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、(中略) 普遍的な視点である『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善(アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善)を推進することが求められる」。

また、高等学校について、中央教育審議会「答申」(平成 28 年 12 月)は、次のように授業改善の必要性を指摘する。

「高等学校における教育が、小・中学校に比べ知識伝達型の授業にとどまりがちであることや、卒業後の学習や社会生活に必要な力の育成につながっていない」。

さらに、大学教育についても、中央教育審議会「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について(答申)」(平成 26 年 12 月)は、次のように質的転換を求めている。

「『主体性・多様性・協働性』を育成する観点からは、大学教育を、従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、学生が主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し解

を見いだしていくアクティブ・ラーニングに転換し、特に、少人数のチームワーク、集団討論、反転授業、実のある留学や単なる職場体験に終わらないインターンシップ等の学外の学修プログラムなどの教育方法を実践する。

(中略) 大学において育成すべき力を学生が確実に身に付けるためには、大学教育において『教員が何を教えるか』よりも『学生が何を身に付けたか』を重視し、学生の学修成果の把握・評価を推進することが必要である」。

以上により、幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校、大学においても、一貫して幼児、児童・生徒、学生自らがその後の学習や社会生活に不可欠な力を確実に身に付けるために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を求めていることがわかる。「主体的・対話的で深い学び」は我が国の教育が目指す到達点である。

学校に求められるのは、単に新しい指導方法を導入することではない。児童生徒が真の意味で「主体的・対話的で深い学び」ができるよう、言葉の力(言葉で考え、物事を的確に捉える力)を正しく豊かに身に付ける機会や方法を確実に保障することである。言葉の力は、一人一人の正確な理解(読む・聞く)活動、適切な表現(書く・話す)活動を支える原動力として欠かせないものである。

さらに、全ての体験や学習の基盤となる言語能力を向上させる観点から、言葉(国語)によって身に付ける資質・能力の充実が求められた。それは、読み書きを支える、確かで豊かな語彙力、文章(段落・文を含む)の構成力・読解力、文章を基にした「主体的な考え」の形成力、情報の活用力、コンピュータの操作力を強化することに他ならない。

他教科(分野)等の内容や方法、言語活動と適切な関連を図り、言葉の機能を自覚して、言語能力(知識・技能)の育成につなげていく必要がある。

3. 理解と表現の基盤に働く思考力

(1) 国語学力を育てる関連指導(学習)

理解(聞く・読む)活動と表現(話す・書く)活動の基盤には思考力が働いている。

たとえば、理解(聞く・読む)活動は自分が納得するために、絶えず思考を巡らせる。この人は、なぜこんな表現(言葉遣い)をしている(する)のか/したのだろうか…。

反対に、表現(話す・読む)活動は相手に説明(相手を説得)するために、どうしたら自分の思いが伝わるか/理解してもらえるか、経験や知識などをもとに思いを巡らす。

いずれにしても、理解(=納得)活動や表現(=説明・説得)活動は、相手を意識して思考力を働かせている。言い換えれば、言葉による思考力が理解活動と表現活動の間を絶えず行き来し、両者を支えている。理解活動と表現活動は、表裏一体の関係にあり、理解活動と表現活動の関連指導(学習)は、もともとと理にかなった方法といえる。

関連指導(学習)は、52年版小学校学習指導要領国語編において、国語(言葉)による表現力と理解力(=国語学力)を形成する有効な指導法として、強調されていた。

「戦後の学習指導要領でも、昭和30年代は単元、40年代は読書中心と変遷を経て、昭和52年版学習指導要領で、表現と理解の関連が明確に位置づけられ、基礎的・基本的事項の精選、表現力の向上が促された。関連指導(学習)については、さまざまな解釈があるが、一般的には、読み書き関連指導により双方の力を伸長することをねらいとする³⁾」。

昭和52年版学習指導要領で関連指導(学習)がひとときわ脚光を浴びたのは、学習指導要領の構成が、それまでの活動主義(聞く・話

す・読む・書く)から、能力主義(知識・技能)へ転換されたからである。

関連指導(学習)は、「聞く・話す・読む・書く」の4つの言語活動を有機的に関連させる学習指導法として古くから知られ、特に「読み書き関連」の有効性が指摘されていた。

しかし、それは主に読解過程に書く活動を取り入れた「活動関連」の学習指導であり、読解(理解)技能と表現技能を関連させる「能力関連」の学習指導ではなかった。

(2) 思考力を形成する関係把握力

昭和52年版学習指導要領の登場によって、それまで別々に行われていた表現(話す・書く)活動と理解(聞く・読む)活動を関連させる能力主義の学習指導が本来の国語学力を形成する方法として重視されるようになった。

当時、文部省⁴⁾視学官として、昭和52年版学習指導要領を取りまとめた藤原宏は、「国語学力の核心は国語で思考する能力であり、この能力の更に中核をなすものが『関係把握力』であることを提唱」⁵⁾した。

藤原によれば、「関係把握力」とは、言葉による思考力を形成する諸能力の中でも、中核をなすものであり、関係把握力において関係させるべき対象となる要素は、具体的に次のような内容⁶⁾である。

- A 言語(記号) 1 語 2 語句 3 文
4 文の集合 5 完成された文章全体
- B (A 言語の表す)事物・事象・現象など
① 語が表すもの ② 語句が表すもの
③ 文が表すもの ④ 文の集合が表すもの
⑤ 完成された文章全体が表すもの
- C 言語表出者のもの(表現者側の、考え方、感じ方、思想、論理など)

³⁾ 日本国語教育学会編『国語教育辞典』(朝倉書店2001)p.73

⁴⁾ 現：文部科学省

⁵⁾ 藤原宏 前掲書 p.114

⁶⁾ 同上 pp.114-115

D 言語受容者のもの(理解者側の、経験、考え方、感じ方、思想、論理など)である。

児童生徒の国語学力を捉えるとは、このようなA、B、C、Dのそれぞれに属する諸要素を児童生徒がどのように結び付けているかの実態を明らかにすることである。また、このA、B、C、Dそれぞれの内容となっている諸要素を正しく適切に結び付けることができるように指導するのが国語の授業である。したがって、児童生徒一人ひとりの結び付け方に対する正確度と適切度を高めることが国語学力の向上を図ることになる。

藤原はこう結論付ける。国語科で育成すべきはあくまでも国語学力であり、その核心は言葉(国語)による思考力の形成である。具体的には、言語の諸要素を正しく適切に結び付ける関係把握力を高めることである。

藤原の提唱から、既に半世紀近く経った。社会の急激な変化に伴い、学校教育にも新たに求められることが多くなった。しかし国語科で培うべき国語学力の基礎・基本(=土台・柱)は変わらない。学習指導要領の内容構成、順番等は変化したが、根本は継承されている。「理解」「表現」「言語活動」「言語能力」「関連指導(学習)」の用語が、今も使われ続けているのは、その証左である。

国語科が担うのは国語学力である。世にいわゆる「国語力」は、国語学力を基底にして、個々人が生涯にわたって磨き続け、身に付けている／いく能力(知識・技能)を意味する。

藤原が提唱した「関係把握力」は指導(学習)用語としては一般化されることがなかった。しかし、「関係把握力」の着想は、文部省・「全国学力状況調査」に関する問題と結果の分析、検証をもとに、義務教育における児童生徒の国語学力の実態と課題を明確にし、教育現場の授業改善を意図したものである。単なる机上論や研究的な理想論を述べたものではない。

全国の小中学校の国語教室で、児童生徒一人一人の国語学力の保障と向上に直接関わっている教師・指導者に向けて、具体的に提案した方法論である。

(3) 国語による関係把握力の向上

では、関連指導(学習)や関係把握力は時代遅れで役に立たない方法論なのか。そうではない。社会の急激な変化に対応するには、幼児、児童・生徒、学生自らが思考・判断・表現し、能動的に行動できなければならない。

教育遺産である、関連指導(学習)や関係把握力は、「能力重視の方向」へ舵を切った今だからこそ、普遍的な視点で捉え直せば、成果の継承と課題の解決を確実に履行する方法として効果的に活用できる。しかも、教育改革に伴う授業改善が国是となったことが、追い風になる。言葉による思考力形成のために、国語学力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」と規定し、物事を言葉で考えて捉える関係把握力を関連指導で効率的、総合的に身に付ける。藤原が提唱した、思考力の中核・関係把握力に学ぶ理由がここにある。藤原の「提唱」を再掲する。

「A 言語(記号)」「B (A 言語の表す)事物・事象・現象など」「C 言語表出者のもの(表現者側の、考え方、感じ方、思想、論理など)」

「D 言語受容者のもの(理解者側の、経験、考え方、感じ方、思想、論理など)」の要素を指定し、それぞれの結び付け方の正確度と適切度を高めることが国語学力を向上させる。

こうした藤原の考え方は、今までの国語科指導でも本質的に変わらず、違和感もない。当たり前実践している／してきたことを整理したにすぎない。国語科では「不易の指導法」といえる。今後ますます期待される、児童・生徒の国語学力の保障、学生・社会人の国語力の向上に資するため、言葉による関係把握力の研究と活用が進むことを願う。

(4) 読み書き関連指導の目的・タイプ

一般的な国語科の学習指導は、理解(聞く・読む)活動と表現(話す・書く)活動をそれぞれ別に行う。教える側からすれば、簡単明瞭で指導しやすい。対して、関連指導(学習)は、理解(聞く・読む)活動と表現(話す・書く)活動の指導事項を精選し、理解力と表現力を同時に鍛える。若干の準備や工夫を要するが、学習の効率化や深化、転移が図りやすい。

国語科では、特に「読む」と「書く」を関連付けた、「読み書き関連指導」の呼び方で行われてきた。「読み書き関連指導」には、次のような関連タイプ⁷が知られている。

- ①話題・題材の関連：読むことで扱った話題や題材と関連させて、書くことにつなげる。
- ②言語活動の関連：読むことの学習過程で、書くことと関連させて、読みを深めるために書く。
- ③言語能力の関連：読むことの学習で得た能力と関連させて、表現方法などに生かして書く。

関連指導のタイプはこの3つに分類できる。筆者がこれまで述べてきた関連指導は、言語能力の関連タイプ③である。

しかし実際の関連指導(学習)では、単元や授業の目標により、必要に応じて①や②と組み合わせで行う。その方が効率よく、理解と表現の有機的なつながりに目を向けさせやすいからである。したがって、1つの関連タイプにとらわれることはない。分類は指導を整理するための便法であり、目的ではない。

関連指導は、本来、「聞く・話す・読む・書く」の4つの言語活動を通して、それぞれの技能を効率的に身に付け、相互に深め合ったり、総合的に運用したりできるように鍛えて

いくことをねらいとする。

そのため、前述した読解(理解)技能と表現技能を関連させて鍛える「能力関連」の学習指導においては、基本はあくまで「③言語能力の関連」である。よって、必要に応じて、「①話題・題材の関連」「②言語活動の関連」を効果的に取り込んでいく。

4. 言葉による関係把握力を鍛える実践

「読み書き関連指導」の観点から、言葉による思考力形成には、関係把握力(言語の諸要素を正しく適切に結び付ける能力)を鍛えることが有効であると述べてきた。

では、関係把握力を鍛える有効な方法として、どのようなものがあるか。本大学における、「論作文技術Ⅰ・Ⅱ」(1年次)、「国語Ⅰ・Ⅱ」(2年次)の授業で実際に効果が確認された方法を紹介する。

(1) パラグラフの意識

関係把握力を鍛えるためには、日本語の文、段落、文章のそれぞれについて、簡単に定義付けしておく必要がある。

たとえば、次のように定義する。文は主語・述語・修飾語の要素で構成され、1つの意味をもつ。段落はいくつかの文で構成され、意味などのまとまりをもつ。文章はいくつかの段落で構成され、1つの主張をもつ。

その上で、日本語の「段落」に相当する、英語の「パラグラフ」を教え、両者の違いを明確に理解させる。佐渡島沙織・吉野亜矢子(2008)⁸は両者の違いをこう述べる。

日本語の「段落」と、「英語」の大きな違いは、「パラグラフ」には構造がしっかりなくてはならないということです。日本語の段落が、文章を書くときの息つぎに似たようなものであるとすれば、パラグラフは、一つの中心文(トピック・

⁷ 日本国語教育学会編『国語教育辞典』(朝倉書店 2001) p.73

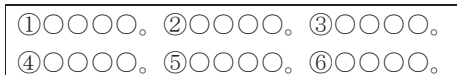
⁸ 『これから研究を書くひとのためのガイドブック』(ひつじ書房 2008) p.33

センテンス)をサポートする文(情報)の塊です。
 パラグラフを書く上では構成が大切になります。

上記では、『パラグラフ』には「構造がしっかりなくてはならない」「パラグラフを書く上では構成が大切」と指摘する。確かに「パラグラフ」と違って、「段落」は「息つぎに似たもの」と考えられる。両者の違いは、構造や構成をしっかりと意識しているか／していないかに起因する。パラグラフが文章の論理的な「基本単位」を意識して構成されるのに対し、段落は文章の感覚的な「区切り」を意識して展開されるからである。

関連指導で説明的文章を書かせる場合は、読解(理解)の学習で得た、パラグラフの構造や構成、記述の仕方(説明・説得順序、接続語)を意識的に模倣させるようにすると、型を踏まえた書き方ができる。それには、パラグラフのイメージや理解が欠かせない。

(A)パラグラフのイメージ



注：文番号で各文の役割に気付かせる。①はポイント文。②以下はサポート文。

(B)パラグラフの原則

- ①字数は200字。5～6文で構成する。
- ②主張(結論)はポイント文。冒頭におく。
- ③説明はサポート文。根拠・理由にする。

(C)パラグラフの意識付け

〈問いと主張・結論をつなぎ、論を展開する〉
 「あなたの長所は？」(問い)に対して、最初に「まじめなところです」(主張・結論)とポイント文を述べる。次に「なぜなら…」(理由)、「たとえば…」(具体例・事実・逸話)など、サポート文で根拠付け、説明する。

(2)内容構成表を作成

たとえば、800字の小論文の場合。
 [序論] 問題把握・自分の見解(200字)

[本論] ①主張・結論、根拠・理由、対策
 ②主張・結論、根拠・理由、対策
 注：①②に見出し(25字内)を付け、それぞれ200字内でまとめる。

①と②を合わせた本論全体で450字。

[結論] 本論の強調・自分の決意(150字)

5. 論理的思考を展開するには (1)トゥールミンモデル⁹の活用

イギリスの哲学者、スティーブン・トゥールミンが考案した、思考を明確にする型がトゥールミンモデル。クレイム(主張/結論)・データ(根拠)・ワラント(論拠)の3要素で構成。三角ロジックとも呼ぶ。

〈関係図〉



注：ワラントはクレイムとデータを結び付ける理由。これが崩れると論理も崩れる。

(関係図：筆者作成)

論理的思考には上記の3要素が必要になる。3要素は互いに支え合う関係にある。

読み書きをするときは、常に3要素を意識して論を展開することが、論理性を担保し、説得力を高めることにつながる。したがって、パラグラフは、主張(結論)文→根拠文→論拠(理由)文の3要素による論理構成(三角ロジック)が基本になる。

(2)文章を展開する接続詞

文脈が上手く把握できない/紡げないときには、接続詞が問題解決の決め手になる。「だから」「しかし」「そして」「なぜ」「たとえば」など、接続詞が方向指示器の役割を果たし、文章の展開を容易にしてくれるからで

⁹ 苦米地英人『ディベートで超論理思考を手に入れる』(CYZO2011) pp.78-87

ある。石黒圭 (2016)は次のように述べる¹⁰。

接続詞は文の先頭に置かれ、先行文脈と後続文脈のあいだに橋を架ける言葉です。先行文脈の内容を踏まえ、後続文脈の展開の方向を定めます。(中略)書き手にとって接続詞を使うと、続きをどのように書き継ぐかという後続文脈の方向が定めやすくなり、長い文章が楽に書けるようになります。一方、読み手にとって接続詞があると、先行文脈の流れのなかで後続文脈の内容をあらかじめ絞り込むことができ、読むのが楽になります。

(3) 説明・説得に欠かせない接続詞

- ① 「なぜなら」「というのは」(理由)
- ② 「たとえば」「実際に」(例示)
- ③ 「したがって」「だから」(因果関係)
- ④ 「そして」「それから」(添加)
- ⑤ 「つまり」「要するに」(換言・要約)
- ⑥ 「それに対して」「反対に」(対比)
- ⑦ 「このように」「こうして」(結果・結論)

注：接続詞により、文章展開(論理：説明・説得)を明確に予測させる。

6. 論理的に説明・説得する型

(1) 主張を的確に伝える PREP 法

- Point(主張・結論) ①の文
- Reason(理由) ②の文
- Example(例示) ③の文
- Point(主張・結論) ④の文

①○○○○○○○。 ②○○○○○○○○○。
③○○○○○○○○○。 ④○○○○○○○○○。

注：くり返し①④文。根拠(説明)②③文。

【参考文献1】

A店の△△カレーはおいしいにちがいない。
なぜなら、店の前にはいつも長蛇の列が

できているからだ。たとえば、先日、その列に著名なカレー評論家・Bさんが並んでいるのを見た。さらに、数日経ち、Bさんは雑誌「□□」に「A店の△△カレーは実にまるやかでコクがあり、(中略)隠し味が絶品である」と紹介した。したがって、A店の△△カレーはすごくおいしいにちがいないと思う。

(2) 柔らかく反論する YES-BUT 法

確かに…(反対論) + しかし…(主張)

注：相手の意見を肯定した上で自説を主張する方法。「確かに」の後に反対論を、「しかし」の後に自分の主張を述べる。

【参考文献2】

若者のスマホ利用率が9割を超え、若者が対面で直接に会話する機会が少なくなった。確かに、スマホは日常生活に欠かせない便利なツールだ。しかし、対面でない、間接的な会話が増えたことで、逆に、若者のコミュニケーション能力は低下しているように見える。たとえば、相手の立場や状況に適切な対応ができず、トラブルに発展する例も多い。したがって、私たちは対面で直接に会話をする機会をもっと増やすべきである。

(3) 自由に列挙するナンバーリング法

ナンバーリングとは番号付けの意味である。

最初に、全体像(伝達内容がいくつあるか)を示し、以下、順番に内容を説明していく。

ナンバーリング法の利点は3つ。①情報が自由に整理できる。②1つ1つが独立して、箇条書きと同じ効果が期待できる。③情報のカテゴリー分けが容易であり、補足(根拠・理由)の文をつなげれば、パラグラフにできる。

注：数や呼び方が自由にできる。たとえば、第1(に)は、1つ(に)は、1つ(目)は、1番目(に)は…。

【参考文献3】

電子辞書には3つの利点がある。第1は、コンパクトである。葉書サイズで軽く、小さなバックに入る。第2は、速く検索できる。短時間で手間が掛からない。第3は、国語辞

¹⁰ 石黒圭『接続詞の技術』(実務教育出版2016) p.1

書以外の機能も利用できる。たとえば、英語辞書、百科事典、電卓など利用価値が高い。

(4) 変化を表す before・after 法

たとえば、〇〇をする／〇〇になる前と後を比較して、その違いを説明する。前後の状況を対比することで変化が表現できる。

自分や社会の状況などを変えた要因は何か。単によくなった／悪くなっただけではなく、どんな影響を、どのように、どのくらい受けたか、具体的に考察できるテーマを選ぶ。

注：社会的変化は、新制度・新商品・新システムができる（始まる）前後について、観点を決めて比較すれば、変化（相違点）や不変（共通点）が見出せる。

【参考文献 4】

1年前、新型コロナウイルスの感染が初めて確認された。そして、世界中に広がった。コロナ流行前は、飲食したり、遊んだり、何でも自由にできた。マスクや手指消毒に神経を使うことがなかった。それに対し、コロナ流行後は、大声、密閉・密集・密接を避けるように求められる。飲食店、施設の利用が制限され、旅行や移動、日常の外出もままならない。自粛生活がずっと続いている。

7. 関係把握力を鍛える実践の総括

これまでの考察から、関係把握力を鍛える国語の実践の要諦が次のように確認された。

- ①読み書きの基盤にある思考力の中核は関係把握力である。それは、言葉（記号）、言葉の内容、表現者、理解者などの相互関係を正しく適切に結び付ける力である。
- ②国語の授業では、言葉による関係把握力の正確度と適切度を高めることが国語学力の向上につながる。主体的に読み書く力（＝関係把握力）を鍛える上で、理解と表現の関連指導（学習）は合理的な方法である。
- ③理解と表現の関連指導には、論理的に説明・説得する4つの方法（PREP法、YES-BUT法、ナンバーリング法、before・after

法）が有効である。それらは、読み書きに働く思考力を方向付ける型として機能する。

- ④上記4つの方法を表現者の意欲や能力に応じて変形し、気楽に使えるように工夫すれば、表現者のもつ経験・体験などを言語（エピソード）化させることができる。そのためには、課題を適切に設定し、方法意識をもたせて取り組ませる。
- ⑤パラグラフの意識をもつには、1つの事柄を主張（結論）・根拠・論拠（理由）の3要素に分け、一本の線につながり考え方とその習慣化が欠かせない。また、目次（章・節・項目）を作り、最小単位の項目をパラグラフに見立てて書く方法も有効である。

【引用・参考文献】

- (1)中学校・新学習指導要領解説総則編 平成29年（2017.7）
- (2)中央教育審議会答申 平成28年（2016.12）
- (3)中央教育審議会「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」平成26年（2014.12）
- (4)栃木県総合教育センター「主体的・対話的で深い学び」
https://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/h29_jyugyokaizen/pdf/h29_jyugyokaizen_01-1.pdf
（参照日 2021.2.6）
- (5)岩淵悦太郎『日本語を考える』（講談社1977）
- (6)藤原宏『関係把握力による読み方指導』（明治図書1984）
- (7)佐渡島沙織・吉野亜矢子『これから研究を書くひとのためのガイドブック』（ひつじ書房2008）
- (8)苔米地英人『ディベートで超論理思考を手に入れる』（CYZO2011）
- (9)石黒圭『接続詞の技術』（実務教育出版2016）
- (10)日本国語教育学会編『国語教育辞典』（朝倉書店2001）